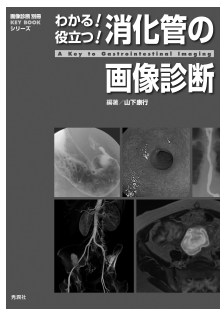




## わかる！役立つ！消化管の画像診断



編著：山下康行

学研メディカル秀潤社

2015年3月刊行

B5判 392ページ

定価：本体6,400円(税別)

山下康行教授編著の消化管画像診断のテキストを拝読して、消化管の画像診断が粘膜病変を追求する時代から、消化管全体を包括的に診断する時代に大きく変化していることを知り、少なからず衝撃を受けた。

消化管画像診断といえば、上部消化管造影と注腸検査、たまに依頼があって悪戦苦闘した低緊張性十二指腸造影や小腸造影を思い出す。お蔭で上部消化管造影と注腸検査は、ある程度の質を担保しつつ相当手際よく検査が行える域に達した。しかし、診断は癌か良性疾患かの粘膜病変の鑑別がポイントであって、刺激的な症例に出会うことは稀であった。消化管画像診断のテキストといえば、キレイな二重造影が満載で、たまに病理所見と比較できるような構成がなされているものがもっぱらであった。

本書は、消化管画像診断に対してそのような印象をもつ私に、まさに時代が変わったことを知らせて

くれた。思えば内視鏡検査の進歩により粘膜病変の解析は内視鏡検査優位となったが、CT、MRI、超音波診断の飛躍的な進歩が消化管を腸間膜、脈管、腹膜、肝胆膵などと連動した機能的臓器として包括的に評価することを可能にした。久しぶりに拝見した消化管画像診断テキスト「わかる！役立つ！消化管の画像診断」で、時代が大きく変化したことを実感させられた。

腸炎、腸管虚血、イレウスのような急性疾患は圧倒的にCTで診断が行われる。消化管癌はCTで遭遇することも多い。本書は、消化管画像診断においてCT、MRIの貢献がいかに大きいかを教えてくれる。内視鏡写真も多く掲載されており、粘膜病変を理解する上で役に立つ。画像診断医として知っておくべき臨床的知識も簡潔に述べられていることもうれしい。また、過去の消化管診断のテキストの図表のなかで重要なものが、改変されることなくそのまま引用されており、貴重な財産を温存していることも、若手放射線科医が消化管画像診断を学ぶにあたり有用なことである。

まさに、日本の伝統のお家芸と先端画像を取り入れた消化管画像診断のテキストである。英訳して海外に本邦の画像診断を紹介するには恰好の一冊ではないかと思う。表紙の帯にもあるように、まさに“新時代”の消化管画像診断のテキストである。若き日を二重造影に明け暮れたシニア放射線診断医にも、これから飛躍する若手放射線診断医にも、新しい時代の消化管画像診断の実践的テキストとして、強く本書を推奨する。

(東京慈恵会医科大学放射線医学講座 福田国彦)

